

心理社会的ケアクラス実施内容と事例紹介

I. 心理社会的ケアクラス実施内容

① オリエンテーション	2月第1週目 ~ 2月第2週目 全2回	オリエンテーションと自己紹介をし、アイスブレイキングでグループの結束力を高める。
② 写真言語法	2月第3週目 ~ 3月第1週目 全3回	感情を言葉で表すためのトレーニングとして、写真を見て自由に物語を紡ぎ出していく。
 <p data-bbox="98 645 1481 678">16個の感情から、自分の想いに近いものを発表。 一枚の写真から物語を紡ぎ出す。 関連性のない5枚の写真から、一つの物語を紡ぎ出す。</p>		
③ 描画	3月第2週目 ~ 4月第2週目 全5回	紙を使い、平面を舞台に自分の思いを表現する。まず陽性感情「好きなもの」、続いて陰性感情「嫌いなもの」、と段階的にテーマを決め、最後は両方の感情を一枚の紙に描くことで、心の中には両価性の感情があることを実感してもらう。
 <p data-bbox="98 1126 1481 1149">自分の心と向き合いながら描いていく。 「愛情」と「怒り」を一枚の紙に描く。 描いた作品をみんなの前で発表。</p>		
④ 粘土・ジオラマ	4月第3週目 ~ 6月第4週目 全7回	小麦粘土で立体を作ること慣れてもらった後、紙粘土の白一色の作品に着色をし、感情表現の幅を広げていった。ジオラマでは「忘れられない日」を表現し、ストーリーとして自分の体験をよみがえらせ、子どもたちはより一層出来事と向き合う事ができるようになった。
 <p data-bbox="98 1574 1481 1597">立体を作る難しさに直面した第一回目。 紙粘土に色づけをしながら心の内を吐き出していく。 亡くなったお母さんの記憶をジオラマに蘇らせた。</p>		
⑤ 戦後特別プログラム	9月第3週目 ~ 10月第3週目 全4回	停戦後、子どもたちが集まれる環境が整ってすぐケアを再開した。心をほぐして、早いうちから戦争で受けた傷をしっかりと吐き出すことでPTSD予防に高い効果が見られた。4回のプログラムで、肩の力を抜いて話し合い、描画、粘土表現と、戦争で見たことを段階を踏んで表現し、心の整理を促した。
 <p data-bbox="98 2022 1481 2051">戦後特別プログラム1、まずは話すことから。 描画表現「家の前で車が直撃弾を受けるのを見た」 人がたくさん殺されて悲しかった気持ちを表現。</p>		

⑥ 音楽 10月 第4週目 ~ 11月 第4週目 全5回 自分たちの想いを歌詞に起こし、メロディーをつけて歌にすることで、ガザの抱える苦しみ・問題・未来への希望を訴えた。更に、これを収録して楽曲データを残した。また、廃材を使って楽器を創り出し、廃材というマイナスなものから音楽(価値)を創り出せるということを実感してもらった。



リズム遊びでウォームアップ。 石橋専門家が入り、作った歌詞を歌にしていく。 手作りの楽器で合奏をする聴力障がい児たち。

⑦ 演劇 11月 第5週目 ~ 2月 第2週目 全10回 役になりきって、演じる楽しさを実感させた。更に、劇中で第三者になりきることで、子どもたちは客観的に自分を見つめることができるようになった。



舞台上がって発声練習。 子どもたちが自由にストーリーを組み立ててスキットを行った。みな、積極的に戦争の怖さや苦しみを表現した。

⑧ まとめ・GHQテスト 2月 第3週目 2015年2月14日に最終発表会を開催。これまでの成果を両親や先生、地域の方々の前で発表し、沢山の拍手を受けて、子どもたち一人一人が自信を得ることができた。最後のケアクラスでは、心の健康度を測るGHQテストを行い、1年間のケアの成果を測った。



発表会にて、子どもたちの代表挨拶の様子。 発表会にて、音楽ワークショップで作った歌を披露。 最後のクラスで心理テストを行い1年間の成果を測る。

II. 子どもたちの変化についての事例紹介

事例1：O君（17歳 男子 聴力障がい児）

O君は多動性障害があり、授業中教室に留まることができず、学校の教員も彼に対してどのように対応すればいいのかわからなかった。誰も相手にしてくれないことでO君は、いつもひとりぼっちで不満そうな表情を浮かべ、教員にちょっかいばかり出していた。ファシリテーターも、初めて彼に会った時、笑顔が見られない事がとても心配であった。

ケアクラスが始まって間もなく、ファシリテーターがしっかり話を聞いてくれることや、作った作品をクラスの皆や先生と共有できることが嬉しくて、O君は積極的にクラスに参加。学校の教員からは、授業態度が見違えるように変わり、落ち着いてしっかり授業を聞くようになったとの報告を受けた。更に日を重ねて行くうちにO君は心からの笑顔が出せるようになり、クラスが始まってから8ヶ月後には、友達も増え、表情が柔和になり、誰もが彼の前向きな変化を感じるようになった。

事例2：M君（16歳 男子 聴力障がい児）

M君の家は2015年夏の空爆時に爆撃を受け、本人も大きな火傷を負った。その恐怖と喪失感、身体に残る傷跡に家族も心を痛めていた。学校が始まる頃には火傷の跡は癒えていたが、家族は彼が空爆の恐怖をどう受け止めているのか分からず不安だったと言う。ところがM君は、空爆直後の心のケアクラスを心待ちに参加。戦後特別プログラムでは自分の体験をはっきり話さなかったが、続く音楽、演劇ワークショップを仲の良い友達と楽しみながら参加し、持ち前の笑顔を取り戻した。演劇ワークショップの中で自分の経験と気持ちを語るワークをした時、自ら空爆の体験と恐怖をクラスの前で語った。「辛い経験をしたけれど、生きてみんなと笑っている自分がどれだけすごいのか」と、自分の価値を認めることができた。家族は手話が難しくてなかなかM君の気持ちを聞けなかったが、ケアクラスでの様子を聞く事ができてとても安心できたという。何より、M君の笑顔が戻ったことが家族にとって嬉しく、ケアの効果を感じたと報告を受けた。

事例3：I君（11歳 男子 聴力障がい児）

ケアクラスでI君は、友達にちょっかいを出し、ふざけてファシリテーターの話を見聞かず、嫌々ワークショップに参加している事が多かった。ところが、音楽ワークショップは彼を強く惹きつけた。歌や演奏を習うことは彼にとって初めての経験であり、耳が聞こえる子と同じような事が自分にもできるのだと、夢中でワークショップに参加するようになった。その後のワークショップでI君は、クラスの皆に話したいことがあると自ら手を挙げ、これまでクラスの邪魔をしていたことを謝った。「皆の経験を聞く事ができ、自分の想いを語るこのワークショップが本当はとても良い物だと感じていたけど、なかなか恥ずかしくて言えなかった」と話し、クラスの皆からは暖かな拍手が起こり、クラスがひとつになることができた。

I君の母親は、家で自ら母親の手伝いをするなど、優しく思いやりのある子になってきたと実感しており、ファシリテーターからケアクラスでの出来事を聞き、大変に喜んでいました。

事例4：Yさん（10歳 女子 危険地域居住児）

Yさんの母親はYさんが幼い時に家を出ており、今は父親、祖母、兄弟と暮らしている。粘土ワークショップ「失った物」の作成のとき彼女は「何故母は自分たちの元を去ったのか、会いに行けるものであればすぐにでも会いに行きたい」との気持ちを涙ながらに語り、粘土作品を作り上げた。Yさんの涙を受けて、隣で聞いていた姉のSさん(12歳)も同時に母を失った喪失感を語り、クラスの皆がこの姉妹の話で心を受け止めた。

この後から彼女たちのクラスは、とても自由に苦しみや悲しみを表現し合い、皆で励まし合って前へ向かう雰囲気は築かれて行った。最終発表会でYさんは、空爆で車いすになってしまった少女の役を感情豊かに演じ、会場全員の心を惹きつけた。発表会を見に来た父親は、Yさんが喪失感を乗り越えて成長してくれたということ、彼女の迫真の演技を心から誇りに思い、心のケアの取り組みに感謝していた。